

大庄屋文書から見た酒田の世相（十）

須藤 良弘

内町組大庄屋・伊東家と米屋町組大庄屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵）からで、句読点は筆者が付け加えている。

一、川船の遭難事故

海運・水運の拠点である酒田では多くの遭難事故が記録されている。次のイ、口は野附家文書『諸御用控帳』で、ハは伊東家文書『宝暦十年御用控』からである。

イ、明和三年（一七六六）十一月二十四日、山王堂町肝煎・九右衛門から米屋町組大庄屋の野附・池田の「兩人宛」に次の「御届申上候」が出された。

「拙者支配山王堂町弥助・松太郎と申者、一昨廿二日、相沢川原より薪積参下り候所、同日暮六ツ時頃、於最上川、水舟二罷成、水死仕候、右式人之内松太郎と申者死骸、宮野浦地方ニ流寄居申候、弥助死骸ハ今以相見へ不申候、如之

御届申上候」。一人の死骸は宮野浦に流れ着いたが、一人は行方不明である。次はこの事故の詳細で、舟は平田郷の相沢川を下り、当時鶴渡川原村の青原寺裏を流れていた最上川で遭難、鶴岡川（赤川）に流されている。

「明和三年戌十一月廿一日、山王堂町弥助・松太郎と申者、同町専太郎二為相雇、相沢村へ薪積二参、青原寺裏邊迄積下候所、俄北風悪敷相成、鶴岡川之方へ吹流され、瀬かかりいたし候所、水舟二罷成候、同日暮殊二闇夜故、方角を失、右弥助・松太郎兩人共水死いたし、弥助死骸ハ相見不申、松太郎死骸岸へ付居候、右場所宮の浦地所二付、宮の浦より御注進申上候」。

死骸は足輕目付により、京田組大庄屋の立合いで吟味が行われた。宮野浦からの連絡で親類等が死骸を引取り、宮野浦渡船で支障があつたが、一日遅れで帰つてきた。酒田町奉行による吟味はなかつた。なお、同行した一艘も遭難したが、乗っていた二人は助かり、吟味後帰っている。

「依之、廿六日、鶴岡御足輕目付兩人、其かかり之大庄屋立合御吟味在之候二付、宮の浦より兩人之親類並きも入九右衛門二罷越候様こと申参候二付、即刻罷越候所、右之者共御吟味御座候由、尤御吟味相済、右死骸被下候二付、親類共きも入九右衛門一札指出、死骸貰ひ、翌廿七日二ハ渡り成兼候故、廿八日二罷帰候、類船在之候得共、類之者共ハ兩人とも助り、御吟味相済罷帰候、尚御役所二而ハ御吟味も無御座候」。

次ぎは前述した足輕目付による大庄屋立合いで行つた吟味の状況と、十一月二十七日に「酒田元米や町松太郎兄三太郎 山王堂町同人伯父六兵衛 きも入加判九右衛門」から「中嶋藤大夫様 茂木野助様」に出された一札である。

「此節、宮の浦より御注進申上候二付、鶴岡御足輕目付中嶋藤大夫様・茂木野助様、京田組大庄や吉田小右衛門立合二而、廿六日二御吟味在之候、相違無之段御吟味相済、松太郎死骸被下候二付、一札之覚左之通」。

「一札之事 酒田山王堂町舟乗松太郎儀、當廿二日水死仕、宮の浦地方二死骸寄居候所、御吟味相済候上、右死骸拙者共江被下置、難有仕合奉存候、依而御請證文如此御座候以上」。

口、御成ケ米（年貢米）を積んだ船が遭難し、米が濡れたり紛失したことから、その弁償をめぐって多くの問題が起きている。

明和五年（一七六八）、川南の黒川組から御成ケ米を積んだ四人乗りの船が飯森山近くの赤川で遭難、百六十俵の内、百四十八俵は陸にあげたが濡米に、十二俵は行方不明となった。

「明和五年子三月十七日、櫛引通黒川組江参候御成ケ米積舟四人乗壹艘、飯森山下二而破船、濡米二罷成候、右船主二ノ丁近江屋治郎兵衛、船頭いなり小路長兵衛、水主八間町宇兵衛、外式人ハ酒田町之者也由、名者相知不申候、右破船御米積高百六拾俵、不残濡米二罷成候二付、酒田町より即刻人足出シ、背負あけさせ候所、百四十八俵背負上ケ候得共、残拾貳俵ハ相見へ不申、捨米二罷成候、」。

この事故は酒田町奉行所に報告された。濡米は入札にかけられ、損害額が算出されることになっていた。「濡米入札ニ申付候間、損料相知次第、可得御意候」。

次いで酒田町組大庄屋栗林より船肝いり専助を通して米屋町組大庄屋野附に、「栗林新右衛門様より船きも入専助を以、申参候ハ、〴〵、右百六拾俵之濡米ハ船頭・水主四人二而、辨米仕来候、〴〵」。濡米百六十俵全部が船頭と水夫が弁償することになっていたというものである。これは船主・近江屋と船頭、水夫二人が酒田町組の者であるので、その利益を考えたものと思われる。米屋町組は水夫の宇兵衛一人だけである。入札と弁償をめぐって酒田町組と米屋町組が対立したものと思われる。

この問題では「船持共打寄」話し合いもしている。米屋町組の主張は、「栗林より申来候者、左様之事ニハ無之、右濡米損料ハ酒田町一組取立御座候、尤積高之内、拾貳俵流失米御座候二付、右流失米捨貳俵ハ船頭水主四人二而、弁米仕来候、〴〵」。陸あげされた濡米百四十八俵は酒田町組から取り立て、紛失した十二俵だけが船頭・水夫が弁償してきただけである。

結局、「流失米斗船頭・水主弁米二而、濡米損料ハ酒田町一組取立二而、相済申候」。米屋町組の主張通りとなった。さらに、その捨米となった十二俵の内、六俵は其後発見され、掘り出されたことから六俵分だけの弁償となった。「右捨米十式俵之内、其後六俵掘出候二付、流失米六俵斗、船頭・水主四人引受罷成申候 明和五年子三月 御町奉行所金井男四郎様御勤之節」。

ハ、宝暦十年（一七六〇）の場合は、前年の卯年に上納する四斗入四十六俵の年貢米が川南で濡米となり、弁償になる（弁米）ところであつたが、濡れ方が少なかったものか、弁償せずに期限付きで上納することを藩から許可された。

「一、御米四拾六俵 卯納四斗入 右者、給人町新右衛門と申者之船、中川組土口村御成ケ米積下二参、右御米積受罷下申候、然ル所、長沼村下二而、水船二相成、右御米四拾六俵濡米ニ罷成申候、御米四拾六俵弁米之所、當月廿日を限り、上納為致可申候 辰七月四日」。

二、明和四年の火災と消防態勢の改善

明和四年（一七六七）の火災では二百八十軒焼失している。次の野附家文書『諸御用控』によると、「明和四年亥五月十七日、山王堂町専太郎家より出火いたし、暁七ツ時より昼四ツ時焼失」。これには焼失戸数は記されていない。

同年五月十九日、酒田町奉行所である「役所」より、「三町年寄大庄屋」に次の「覚」書が出された。三町とは酒田町組・内町組・米屋町組で、年寄は酒田三十六人衆の年寄役である。

「一、御町出火之節、諸道具紛失候ハハ、其品委細書出し可申候、右之紛失物質物二取、又者買取候者在之候ハハ、早速注進可致候、若、隠置後日相知候ハハ、急度可申付候、此段惣御町へ可相觸候以上」。消火道具の紛失があつた場合、

それを質に出したり、買った者がいたらすぐ届けるよう、もし隠していて、後であられた場合は罰するということを町中に知らせるようにとの通達である。

五月二十五日、御町奉行所より仰せ出されたことから、年寄・大庄屋が評議した結果、「此度之類焼二付、家作等可致様無之、難儀至極之趣、相願申候二付、右之金高貸渡可然と存候」となった。内町組大庄屋伊東と同心七人の類焼について、次の救助が決まった。

「此節、伊東弥十郎、御同心七人致類焼候二付、御町用金より左之通拝借被仰付候 一、金三十五両 御同心七人、忝人二付五両ツツ、但十年賦 右者は迄例も無之候得とも、家作可仕様無之、難儀之趣申立、被仰付候 一、同十七両 伊東弥十郎 内拾両者先例之通 同七両者小舟方役相勤候二付増拝借、右十七年賦上納」。同心は前例がないが、家を作ることも出来ないほど困窮、伊東の場合は十両は先例通り、七両の「増金」は小舟役を勤めていることからで、「金七両先例之通、上より拝借、三年賦二被仰付候」である。

その他の類焼については、「一、類焼困窮之者共、小屋かけ料として御町用金より忝軒二忝貫文被下置候 一、辻番所焼失二付、忝貫文雑用钱より當分内借申付候 一、類焼之肝煎共、忝軒二付、上より忝俵半ツツ拝借、三年賦被仰付候。御町用金より先格之通、忝両忝歩ツツ十年賦二被仰付候」。救助とはいえ返済である。

被災者の救済や消防組織の改編については、この論集の「酒田の世相一」にも少々触れている。この火災での焼失数は酒田では比較的小さいものであるが、消火活動の際「火消丁持只今迄組付二申付置候得共、其組々一向わかり不申、甚不都合」ということで問題となった。その改善が評議され、「右之通申上候所、其趣早々申渡置候様、被仰付申渡候、尚又御奉行所より被仰出書左之通」と、次ぎの「定」が出された。

「一、火消丁持共、兼而人数割等在之候得共、別而此度改組付申付候二付、只今迄と違ひ、出火之節者、遠近二不構一組之内拾人宛者、其組之宅へ早速駆着、頭之指圖次第第二いたし、他組と混雜いたし不申、火事場二おゐて違乱無之様、

兼而心得可申事」。火消組一組の内十人は組の家に、遠い近いにかかわらず駆けつけて、そこにいる頭の指図に従い、火事場では他組と混雑しないよう。

「一、一組之内拾人ツツ者、其頭之宅江駈付、其余ハ向寄次第火事場江早速かけ付、火消第一二候、跡より其組々頭かけ候ハハ、火印之所江相集、一組切相働可申候」。十名は自分の組の頭の家に駆けつけ、それ以外は集まり次第、火事場にかけて、消火第一に。それぞれの頭がかけつけたら火印のある所に集まり、一組切りだけで働き、「他組と混雑し決而無之」。

さらに「火印持第一二相心得、場所宜見立候ハハ、屋根江火印立、猥り駈寄行不申、火鎮、引取候節も混雑無之、頭々之得差圖、一組ツツ引取可申事」。火印持は良い場所を選んで屋根に火印を立て、勝手に場所を離れない事。鎮火した時は、各組の頭の指図によって、混雑しないで一組ずつ引きあげる事。なお丁持とは物を運送する業についている者で、火災が発生した時には消火活動に従事することになっていた。

「一、火消丁持之儀者、火消第一二候二付、御手擬等も是迄有之候事二候得ハ、此末出入心易き所有之候共、決而脇方江相越不申、火防第一二心かけ、手傳等堅無用二可致候、若相背者有之、頭より申聞候ハハ、及沙汰可申候」。火消丁持は火消しが第一の仕事で、手当も受けているので、決められた場所の消火に努め、いくら親しく付き合っていた家であっても、自分の任務を放棄して消火の手伝いをしない。もし違反した場合は処罰する。

「別段二申達候、火防第一二心かけ相働、若居宅類焼二而も有之候ハハ、其節吟味之上、可被申聞候、何分及さた可申候、此段も相心得居候様、御申渡置可有之候以上」。火消丁持は火防を第一と心がけて働き、消火活動中に自分の家が類焼した場合は、事情を聞き、補償を考えている事を申し渡している。

三、明和五年の酒田町の現状報告

明和五年子（一七六八）八月、「酒田三町九人」より「御町奉行所」に「被遊御尋候御箇条江、有無之儀共脇書仕指上申候」。町奉行所より酒田町について箇条ごとに質問があり、酒田三町組の年寄・大庄屋九名が次ぎのように答弁している。（野附家文書『諸御用控』）

「一、手船・買船数、何拾挺立、何艘在之哉之事　御書付之通、所持仕候者無御座候　一、小早船　小早船

と申者無御座候、尤濱賣船と申候而、械壹枚二而も小通イ舟四十三艘御座候　一、荷船　荷船と申候而、大船者

無御座候、獵船之内小廻シ舟と申候而、越後新潟、下筋ハ秋田邊迄、賣物積往來仕候船三拾石程積候船三拾九艘御座候　一、御領分廻船　御書付之通、所持候者無御座候」。

大問屋が所有している大型船と思われる手船・買船はない。小型で速度が速いと思われる小早船はないが、械一枚で航行し、浜で魚などを売買するような「浜売船」といわれている「小通い船」は四十三艘ある。ここにある「械」とは、わらなどで作られたむしろの物を帆としたものと思われる。「荷船」と称する大船はないが、漁船の内、新潟や秋田方面迄は荷物を運ぶ三十石程積める「小廻舟」は三十九艘ある。領内に大型の廻船所持者はいない。

「二、市日、御書付之通、無御座候　一、辻々御高札者、無御座候、四之丁ニ御高札壹ヶ所御座候　一、町屋敷何拾町在之哉之事　酒田町・内町・米屋町組、合四拾四町、家数三千八百軒御座候」。市が開かれる日はない。高札は辻ごとにはないが、本町四丁目に一か所だけある。町数四十四、家数三千八百軒。

「一、米・麦・大豆　御書付之品相場之儀ハ、時々相替候而、高下仕候　一、金・銀・錢両替之事　金銀之両替ハ無御座候、錢両替ハ時々高下仕候　一、庄内二而者、何年之米相場承度　年々十月冬壹番御値段相立、御

領内並他所共ニ引合、相場ニ罷成候」。米・麦・大豆の相場は時々変わり、高下がある。酒田では金銀の両替はしないが、銭の両替はあり、時々高下する。庄内の米の相場は、年々冬十月の一番値段を決めるが、領内や他所の値段を参考にし、相場としている。

「一、御領分ニ非人穢多 非人家数廿軒、穢多家数廿九軒御座候 一、至忠・至孝 御書付之通り之者、当時

無御座候 一、他国者入込住居之儀 五ノ丁伊庭や安右衛門、突貫越後や惣兵衛と申者、式軒御座候」。特に忠

義や孝行に優れた者はいない。他国者で酒田に居住しているのは二軒。「突貫」とは、港町の酒田町組から城下町の内町組・米屋町組への通路がなかったことから、寛永から正保の年代に、本町一丁目より内町にかけて土塁を突き抜き、外堀をうめて通路とした所である。「突抜」などとも書かれる。

四、酒田町周辺の旧跡

貞享二年丑（一六八五）二月、「右之旨、松平藤兵衛様より御尋ニ御座候間、斎藤与右衛門書上ケ申候」（伊東家文書『延寶元年 萬覚書』）。亀ヶ崎城代・松平から質問されたことを内町組大庄屋・斎藤が書き上げ差し出したものである。改目村（新田目）・矢流川村等現在の酒田市、三川・上寺・落伏・菅野など遊佐町、八幡地区の観音寺村などが記されている。鳥海山の「半服」とあるのは中腹と思われる。三川村の八幡堂の大木の下に、源義家合戦当時の「矢の根」が埋まっているという伝承や慶長年間の最上勢の酒田城攻撃の際に菅野が戦場となったことなども記されている。なお、義家寄進と伝えられる新田目・大物忌神社の太刀は国の重要文化財に指定されている。

札辻は酒田本町四丁目にあったが、「酒田札辻より吹浦迄六里 此駄賃 百三拾文ハ侍衆 百八拾文ハ商人」。侍は商

人より三十文安い。

「一、荒瀬之内改目村迄酒田より式里、此所二古館有、館主ハるす左衛門と申候由、只今ハ八幡堂有之、其昔ハ源義家公之御陣場と申處ニ御座候、御刀此村御座候、新留須とも申候　一、改目村より壱里半程離、石辻・三川と申村

有之、是ハ義家公之阿部等を御退治之軍場之由申候、三川村ニ八幡堂御座候、此社之大本之下ニハ其時之矢之根御座候由申傳候、右両村之北・南ハ川ニて御座候　一、遊佐之内上寺迄、酒田より四里程、上寺より五丁程南東ニ古館御座候、阿部等楯籠由申傳候、上寺より石辻・三川迄半里程、上寺より鳥海山御堂迄ハ拾式里程」。

「一、遊佐之内劔積寺迄六里程、薬師堂御座候

一、落伏迄六里半程、永泉寺ト申古跡御座候、おちふしより三

里半程、吹浦よりハ半里ほと、此間ニ菅野と申古館御座候、昔之城主ハ傳不申候、慶長頃か、最上勢秋田勢せめ申時、吹浦之後話か、遊佐之百姓籠申由、下勢鳥海山半服より下ニ花森と申所を越申ニ付而、百姓共亀ヶ崎之城へ落申由、申傳候　一、吹浦より鳥海山本堂迄山道六里ほと、其道筋之南ニ當テ、山半服より上之谷ニ、とりの海と申池有、吹

浦両所社ニハ御綸旨御座候由、及承候」。

「一、観音寺迄四里、村之東ニ古館有、昔館主木次出雲と申候由、申傳候

一、矢流川村迄酒田より式里程、村

より丑寅ニ當テ、古館御座候、昔之館主池田讃岐と申傳候、是ハ秋田太郎と申仁押よせ、打申由、申傳候」。

伊東家文書『竹のほうき式』に、「一、大銅元年迄、東禪寺之城、今之所より壹丁程東ニ御座候、只今者川ニ相成申候、其時分北國海道者山本ニ付、升川村ヲ通り申候、大銅二年三崎山海道切開、升川村之百姓半分越参、女鹿村たて申候。大同元年（八〇六）當時の東禪寺城（亀ヶ崎城）の位置。北国街道（浜街道）は平田の山元經由であつた。

五、世相あれこれ

次のイ、ロ、ハ、ニは伊東家文書の『寛文八年申四月 留書帳』から、ホ、ヘは『延寶元年 萬覺書』からである。
イ、寛文八年（一六六八）五月、「右之通、御當地より他所へ賣出シ申荷物、大圖如斯御座候、此外當地より他所へ出申候物、無御座候」。酒田より出荷される物は、いわし・鮭・鱒・八ツ目うなぎ・そうめん、鮭等の数量は大よそとある。

「一、鰯荷物 三千三百四、五拾駄 内六百五駄未ノ年 同式千七百三、四拾駄申ノ年 一、鮭荷物 百五、六拾駄 但年中ノ大圖 一、鱒荷物 三拾式、三駄 但右同断 一、八つ目荷物 三拾四、五駄但右同断 一、素麵荷物 三百六、七拾駄 但右同断」。

ロ、寛文十年（一六七〇）四月晦日、「右之通、惣町中江、急度可被相觸者也」と、町中にお触れが出された。

「一、今度、盗人之同類、孫兵衛・八蔵・茂兵衛・角右衛門四人、御領分中何にても搦捕候者、於有之ハ、縦宅人搦取共、為其褒美、金子拾両可出候、」。盗人の同類四名を捕らえる事。たとえ一人を捕まえても金十両のほうびを取らせる。さらに残りの二人、三人を搦取った場合は「應其働」じてほうびを出す。

「一、盗人同類之内より残者、有所を存申出候者、其科をゆるし、金子式拾両可出之事 附、何者候ても、盗人有所を存、注進於有之ハ、褒美可出之事」。同類の者であっても盗人のいる場所を申し出た者は、その罪を許し、褒美二十両。何者であっても居場所を知らせた場合はほうびを取らせる。

「一、不依何者、盗人之有所を存、又ハ見合候者、早々可申出候、若致隱密、不申出、脇より於相聞ニ、急度曲事ニ可被仰付候事」。誰でも盗人の居場所を知り、又は見かけた場合はすぐに申し出る事。もし隠していて、脇から聞こえ

てきた場合は、必ず罰する。

ハ、寛文十年五月七日、当年は米不足で、秋までは新酒造りを堅く停止、酒の辻売り・触れ売りの禁止。これを受けて「領内御朱印所之寺社領へも新酒造之儀御停止之事」。これの「違背之輩」を訴え出た「訴人」にはほうびを出すという通達が入っていた。さらに、同年六月二十六日には御町奉行所より「内町年寄六人」に次ぎの厳命があった。

「先月、従御公儀被仰付候酒觸賣・辻賣仕間敷候、當秋中迄、新酒造り申間敷候、右御法度之旨、町中へ急度申渡候、三十日過候者、改可申旨、被仰付候間、堅申付候以上」。

三十日過ぎると改めて通達を出すといっているように、同年七月、八月、九月のそれぞれ二十五日にはほぼ同文の通達を内町組大庄屋の斎藤与右衛門・三丁目弥右衛門に出している。

二、「寛文拾かのへ・いぬ年六月廿一日」、内町組大庄屋の斎藤与右衛門・三丁目弥右衛門が「小倉五兵衛殿」へ出したもので、キリシタンは一人もいないし、寛文九年（一六六九）幕府によって禁止された日蓮系の「不受不施」からの寺請証文も取っていない。他所から浪人がまぎれて入ってきていても吟味し、怪しい者は必ず注進し、うそをついていると訴える者が出た場合は、罰を受けるというものである。

「一、家数合式百五拾六軒 但五人組数五拾六組 内町中 吉利志丹入満波天連耶蘇宗門、其所之名主・五人組以テ改申事 内町中僉儀仕候へ共、右之宗門壱人も無御座候、並法花不受不施寺請証文、取間敷候、自今以後、他所より諸牢人何様之まされ者参候共、吟味仕、少も無覺束者有之候者、急度御注進可申候、若脇より偽申候と、訴人御座候ニおひては、何様之曲事ニも可被仰付候、為後日一札仍如件」。

ホ、出羽国の幕府領から集められた年貢米を江戸に回送するまで保管する蔵が最上川河口に作られることになり、寛文十二年（一六七二）に河村瑞賢がその仕事に着手し、完成させている。そのため御米置場は瑞賢蔵とも称された。この工事については諸書があるが、ここでは次ぎの「濱御城米御蔵屋敷御普請之覺」を紹介する。

「一、寛文十式年子ノ正月廿五日より同二月廿四日迄二究 但酒田人足ノ日数

是ハ正月四日より同十五日迄

仕候 一、壹万八千九拾九人ハ遊佐郷・平田郷・荒瀬郷・川南郷之分

是ハ正月廿五日より仕候 一、壹万式

千百九拾九人ハ酒田よりノ人足

但役人衆三浦七右衛門殿・仙場彦右衛門殿・細井松兵衛殿・中臺式右衛門殿毎

日出シ申候、下役人ハ鵜渡川原衆四、五拾人斗、外ニ酒田三拾六人之内五、肝煎中皆々出申候、郷中よりハ大肝煎中、

鶴岡より百人も参候、但かやふき蔵拾五間ニ二ツ立申候、又、役人衆居被申候屋敷ニツ立、其外番所ニツ、水よけ仕

候ニ明俵四万俵酒田在々共ニ出申候、其節江戸よりノ御役人、雲津六郎兵衛様・梅沢三郎兵衛様御兩人被参候」。

普請の人足は川南も含み庄内一円から集められ、一月二十五日から二月二十四日までの一か月での突貫工事である。

御役人は亀ヶ崎城代の中臺等で、毎日出勤、下役人に鵜渡川原在住の足軽四、五十人、外に酒田三十六人衆の中から五人、町中の肝煎、郷中の大肝煎、鶴岡からも百人も出勤。かやぶきの蔵二つ、役人居住の屋敷二つ、番所二つなどが作られた。水除け用の空俵四万俵も酒田や村々から集められた。

へ、延宝九年（一六八一）五月二十九日、幕府の巡見使が酒田にやってきた。酒田は一泊だけで翌六月一日には立ち去ったが、酒田近辺にある小湊や濱大渡り（酒田札辻より十四丁）の渡船場に、巡見使一行百人が乗る船の準備に大変だったようである。一人乗りの舟とは船乗り一人のことで、清川は庄内から最上地方への最上川水運の発着場である。宿の惣左衛門は鎧屋、与助はかが屋、太郎兵衛は上林で、三十六人衆年寄役、酒田町の中心である本町三丁目・四丁目に屋敷を構えていた。

「一、御巡見様 保田甚兵衛様 三千五百石 上下四拾六人 宿惣左衛門 左之喜三郎様 千三百石 上下

廿七人 宿与助 江川傳右衛門様 五百俵之扶持 上下廿七人 宿太郎兵衛 延寶九年酉ノ五月廿九日ニ、酒

田へ御着、御一宿、六月朔日ニ御立被成候、吹浦へ渡舟壹人乗六艘参候、小湊へ壹人乗六艘、大渡りへ御召舟五人乗三艘・御荷物舟三人乗拾艘、宮野浦へ、清川へも五人乗壹艘・三人乗六艘越申候」。

宮野浦へは荷物掛が派遣された。